

2012年頭挨拶

主イエス・キリストからの恵みと平和が、
新しい年も皆様の上に豊かにありますように！

昨年取り組みに感謝

昨年、福岡教区では、東日本大震災に際して、「被災者支援室」を立ち上げ、被災された方々に心を向けながら、慈しみ深い神様に御手を差し伸べて下さるよう祈り、一日も早い復興を願いつつ過ごしてまいりました。

また、仙台教区からの司祭派遣の要請に応じて一人の司祭を派遣して、被災者の心に少しでも寄り添いたいとの福岡教区民の心を表明しました。

皆様のご協力に心から感謝申し上げます。

さて、昨年の福岡教区の優先課題は、『救いの秘儀を①知り（信仰生涯学習）、②追体験し（典礼祭儀の充実）、③生き（家庭と社会生活での実践）、④伝える（福音化）』でした。その中でも特に、『①キリストの救いの秘儀を知る』ということに焦点を絞り、『信仰生涯学習・元年』にすることを目指して励んでまいりました。先般の『教区の日』の集いでは各小教区での具体的な取り組みが報告されました。

教区長からの呼び掛けに寛大なご理解とご協力を示し、誠心誠意応えようと励んで下さった教区民のご尽力に、心からの敬意と感謝を申し上げます。

目に見える成果がたとえ期待通りではなかったとしても、地道な取り組みの継続が、いつの日にか必ず神のみ業を各教会に実現させると信じています。

今年目標

新しい年の福岡教区の優先課題は、昨年と同様に、『救いの秘儀を①知り（信仰生涯学習）②追体験し（典礼祭儀の充実）、③生き（家庭と社会生活での実践）、④伝える（福音化）』を繰り返しますが、特にその中の、『①キリストの救いの秘儀を学ぶ』ということに再び焦点を絞って、『信仰生涯学習の第2年目』の取り組みに励みたいと思います。

昨年同様、各小教区で、全員が参加できるような「学ぶ機会」を工夫して実践して下さい。既に具体的な実践に取り組んでいる教会も、更なる継続と充実を目指して励んで下さるなら幸いです。

「信仰年」開催の中で

教皇ベネディクト16世は、福岡教区のこのような取り組みを推薦し後押しをするかのように、今年10月11日から来年11月24日までを「信仰年」とすることを決定しました。

教皇様は「信仰年」開催の趣旨を説明する自発教令『ポルタ・フィデイ』の中で、「私たちキリスト者は、しばしば自らの活動の社会的・文化的・政治的な結果に関心を向けます。そして、信仰を社会生活の当然の前提と考え続けます。しかし、実際には、この

前提は当然のものではなく、しばしば公然と否定されています。過去においては、統一的な文化状況を見出すことは可能でした。信仰の内容と、信仰から靈感を受けた価値観に訴えることも広く受け入れられていました。しかし、現代においては、社会の広い分野において、同じことを言うことはできません。信仰の深刻な危機が多くの人々に影響を及ぼしているからです。・・・だから、私たちは、キリストと出会うことの喜びと新たな熱意をますます明らかに示すために、信仰の道を再発見しなければならないのです」(ポルタ・フィデイ、2番)と訴えておられます。

つまり、教皇様が全世界のキリスト者に願って止まない『キリストとの出会いの喜びに達するための「信仰の道の再発見」』は、福岡教区が取り組んでいる『キリストの救いの秘儀を学ぶ』ことの目的でもあるのです。

更に、教皇様は、同教令の中で、2012年10月11日が、「第2バチカン公会議」開幕日の50周年、及び『カトリック教会のカテキズム』発行20周年の記念日であることを鑑みて「信仰年」を決定しています。つまり、教皇様は「第2バチカン公会議」と『カトリック教会のカテキズム』が変わらない価値と現代的な意義を有していることを確信し、改めて総てのキリスト者がその再確認と再評価をすることによって、信仰の正確な内容を自分のものとし、そこから信仰を生かし、清め、強め、告白することができるようになって欲しいと願っておられるのです(ポルタ・フィデイ、4・11・12番)。

教皇様のこのご意向に従って、今年の私たちの具体的な取り組みとして、「第2バチカン公会議」の公文書や『カトリック教会のカテキズム』、及びそれを台本にして日本司教団が編集した『カトリック教会の教え』などをぜひ読み返すことをお勧めします。なぜなら、教皇様が仰っているように、「それらの公文書が適切に読まれ、消化吸收されるなら、私たちに新しい世紀の歩みの方向性を与える確実な羅針盤が提供されるからです」(ポルタ・フィデイ、5番)。

「日本26殉教者列聖150周年の中で」

150年前の1862年(江戸幕府の末期)、まだキリスト教への禁教が国策として継続し、迫害と弾圧の大嵐が吹き荒れる中、パリ外国宣教会の宣教師によって横浜に日本再宣教のための最初の教会が献堂されました。

同じ年に、教皇庁は既に列福されていた日本26殉教者を聖人として列聖しました。日本の教会が再福音宣教への第一歩を踏み出してから150年目という節目の年を迎えます。

逆風が吹き荒れる中、当時の宣教師たちが命をかけて日本人にもたらしたかったものは一体何だったのか、また、敢えて、あらゆる困難と苦難を引き受けても遂行したいと熱望したその使命と情熱は一体誰のため、そして何のためだったのか、更に、教皇庁を初め、全世界の教会が心をつにして日本人のために祈り、支援したその目的は一体何だったのか、などを思い巡らしながら、歴史の流れの中で信仰の遺産を再確認することも意味のある一つの振返りだと思います。

最後に

神様に会い、神様を体験し、神様との交わりの中で生きた殉教者と宣教師たちの本物の模範は、信仰における逆風が吹き荒れている現代社会に生きる私たちに、より一層信仰の喜びと誇りを与える福音の注解書になるでしょう。

昨年と同様、今年も来る11月23日（金）「勤労感謝の日」を「教区の日」として、全教区民が司教座聖堂（大名町教会）に集まり、各教会での一年間の取り組みを報告し、教区民の一年間の活動と営みをミサ聖祭の中で神様に奉納したいと思います。

エリザベトから「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう。」と賛美された聖母マリアのお取り次ぎを通して、教会の中に生きておられる主イエス・キリストとの出会いが実現され、交わりが深められ、豊かにされて、その喜びが周囲に伝わる事が出来るように励みましょう。

カトリック福岡教区司教



ドミニコ宮原良治